

# 大岡昇平の作品における戦争批判の意味

## —「靴の話」「食慾について」の改稿をめぐって—

林 姿瑩（リン シエイ）

（台湾大学日本語学科修士課程二年生）

キーワード：靴、食慾、僚友、改稿、戦争批判

### 1・はじめに

大岡昇平（1909～88）は昭和 20 年 12 月復員し、それから約二年間の沈潜期の後、昭和 23 年「俘虜記」（現在「捉まるまで」と改題）を始めとして、一連の戦争物を発表した。彼の発表した最初の 3 年の作品を大まかに分類すると、『俘虜記』<sup>1</sup>、「野火」<sup>2</sup>、「武蔵野夫人」<sup>3</sup>、『サンホセの聖母』<sup>4</sup>などの四つの系列に分けることができよう。『俘虜記』、『野火』<sup>5</sup>、『武蔵野夫人』<sup>6</sup>の三作はよく知られていて評価の高い作品であり、従来の研究がこの三作を中心に盛んに行われてきた。しかしそれに対して、発表・創作時間がほぼ同時期である『サンホセの聖母』系列の作品<sup>7</sup>は、従来の研究ではほとんど言及されていない。時には「疎外日記」「歩哨の目に付いて」「出征」が論じられたが、多くは傍証・補助資料として扱われ、本格的な文体論や作品論として論じられることは少なかった<sup>8</sup>。大岡の戦後の出発として『サンホセの聖母』系列を無視することはできないのみならず、その系列も『俘虜記』、『野火』、『武蔵野夫人』三作の比較対象になり得ると思う。そのため、本稿は『サンホセの聖母』系列に目を向け、その系列の最初に発表された「靴の話」「食慾について」<sup>9</sup>について検討したい。

<sup>1</sup> 『俘虜記』（創元社、1948. 12）、『続俘虜記』（創元社、1949. 12）があるが、ここでは『合本俘虜記』（創元社、1952. 12）を指す。

<sup>2</sup> 『文体』第三号（1948. 12）と第四号（1949. 7）に二回で連載。

<sup>3</sup> 『群像』新年創作特集号から九月号まで（1950. 1-9）に全八回で連載（八月号は休載）。

<sup>4</sup> 『サンホセの聖母』（作品社、1950. 6）は最初の単行本。

<sup>5</sup> 『野火』（創元社、1952. 2）は最初の単行本。

<sup>6</sup> 『武蔵野夫人』（大日本雄弁会講談社、1950. 11）は最初の単行本。

<sup>7</sup> 「出征」「海上にて」「比島に着いた補充兵」「サンホセの聖母」「ミンドロ島誌」「暗号手」「襲撃」「俘虜逃亡」「西矢隊奮戦」「食慾について」「靴の話」「八月十日」である。

<sup>8</sup> 本格的な作品論は、佐藤洋一の「大岡昇平『暗号手』の方法—初期作品の系譜・〈死者〉という身分—」（『国語国文学報』1999. 3）、「大岡昇平『出征』の文体—初期作品の系譜と方法—」（『愛知教育大学大学院国語研究』1998. 3）、「大岡昇平『靴の話』の言語技術—メタフィクション構造の文体—」（同 1997. 3）がある。

<sup>9</sup> 初出は「靴と食慾」（『小説界』一・二月合併号、1949. 2）という題で発表され、その内容は更にそれぞれ「靴の話」「食慾の話」というタイトルでつけられて構成された。文末に「<一九四八・十・三〇>」とあるが、単行本以来削られた。そして、本稿では「靴の話」「食慾について」という使い方は『大岡昇平全集』（筑摩書房、1994. 10。以下『全集』と略。）によるものである。ちなみに、『全集』の解題・解説によると、「靴の話」と「食慾について」は『大岡昇平集 2』（岩波書店、1982）を底本にしたものである。

「靴の話」「食慾について」は最初「靴と食慾」という題で昭和 24 年に『小説界』に発表されたが、約一年四ヶ月を経て単行本『サンホセの聖母』で再び現れた。この時「靴と食慾」は「食慾について」と「靴の話」の二篇に分割、改稿され、単行本の構成によれば、12 編の中でそれぞれ第 10、11 番目に配列される。初出誌と単行本の二稿を比べてみると、多くの箇所が改められたことがわかる。それだけではなく、その二稿を『大岡昇平全集』（筑摩書房、1994。以下『全集』と略。）と比較するとまた幾つかの箇所が改められた。そのため、本稿は「靴と食慾」の改稿をめぐる分析し、大岡の創作意図と創作方法を探究し、あわせて大岡の戦争批判の意味についても検討したい。

## 2・改稿について

### 2・1、「靴」をめぐる改稿——心理の捉え方

戦場において日本軍にとって「靴」がどれほど重要なものは、「靴の話」の中で窺える。兵隊の穿いている靴は、「ゴム底鮫皮の軍靴」であり、それは「比島の草によく滑り」、「よく水を通」すというような粗雑なものである。米軍が上陸してから山中の逃避行で、「植物」たる靴底は「動物」たる上皮と永遠の別れを告げ、「軍靴」は既に穿き潰された状態にあるのである。それにもかかわらず、兵隊はそんな靴を捨てずに、そのまま「襤褸を足首に巻いて歩いて」、機会があれば、倉庫にある「やはり鮫皮で」「予備新品の靴」を盗むのである。そのため、軍隊で「靴の盗難が頻りに起った」わけである。

「私」の靴も例外なく同じぼろぼろな状態にあるが、ある日松本という僚友が死んだ直後、彼の盗んだ「予備新品の靴」はまだ「返納」されていないうちに外に放置され、それに「あたりには人はいない」ため、「私」に持ち帰られたのである。この「予備新品の靴」がやや小さいけど、「私」は俘虜収容所に入ってからずっと穿いている。

初出の『小説界』と単行本との間で、最も多く改稿された箇所は、「私」が「予備新品の靴」を手に入れた「数日の後」、「連日四十度の熱が続き」、「松本の分隊の兵士が二、三人連れ立って交渉に来た」時に、「私」の心理に関する描写のところである。「私」が病床についているので、分隊長は彼らをからかって罵って追い帰してくれた。「五分とはかからなかった」この間、「私」の心理を描く方法は「幾通り」もあると作者は述べ、その「幾通り」の描き方を次に試みたのである。以下は初出稿の原文を引用する。（改稿前後を対照しやすくするために、単行本や全集で改めた段落・箇所を【A】～【G】という記号をつけた。また、下線は改稿された部分で、波線は引用者が付したもの。以下同様。）

…その描き方は幾通りもある。例えば——

【A】「枕にした靴は火の塊となつて私の頭を炊くかと思はれた。私は何度も『靴はこゝにあるぞ』と叫んで、それを彼等の前に投げ出したい衝動に驅られたが、結局実行する勇気が缺いた。足腰の立たない病人として、私は分隊の支持を失ふのを、何よりも怖れなければならなかつたからである。」

と書けばこれは弁解であり、従って誇張である。

【B】「彼等の會話を聞かぬふりをし、執拗に眼を閉ぢながら、私は心に一種陰惨な快感を

感じてみた。互ひに人のことはかまっていられないかういふぎりぎりの生活の中で、私も人並みでみられることを私はむしろ喜んでみた。私は死ぬかも知れないと懼れてみたが、まだ全然この靴を穿く希望を捨てゝみたわけではなかった。そしてかうして私が靴を持ち続ける以上、僚友は私に悪くはしないであらう、と漠然と考へてみた」

と書けばこれはシニシズムであり、やはり誇張である。

【C】 事實は、分隊長の意識的な嘲笑的な口調、やはり意識した怒声、相手のおずおずした哀願、既に返事を豫想したやうなためらひがちの言葉を聴きながら、私は何も考へてゐなかつたといふのが正しい。私はたゞわくわくしてこの苦しい瞬間が早くすぎ去つてくれゝばいゝと思つてみた。かうして周囲の者のなすがまゝに任せねばならぬ病人の悲哀があつただけである。

【D】 しかしかう書いてもなお私はその時の私の心を正確に描いたとは感じない。

【E】 かういふ情緒だけを分離した描寫では、この時私の枕にしてゐた靴はどこかへ行つてしまつてゐる。

【F】 結局靴だけが「事實」である。こういう脆い靴で兵士に戦うことを強いた国家の弱点だけが「事實」である。それは必ずしもその兵士の心理に、私はかう思つた、あゝ思つたといふ風に働きはしないが、根本においてそれを決定している。

【G】 しかし私が私の経験を物語るならば、私はやはりかう思つた、あゝ思つたと書かねばならぬ。書かねば何も始まらないからである。心理は近代文學の負つた十字架である。その不正確を嘲るは易いが、心理なくて近代的人間はゐない。たゞ彼等はそれを誇つてはならない。

対照表 I 心理の描き方をめぐる改稿

	初出誌『小説界』	単行本『サンホセの聖母』	『全集』
A	「 <u>枕にした靴は火の塊となつて私の頭を炊くかと思はれた。私は何度も『靴はこゝにあるぞ』と叫んで、…、私は分隊の支持を失ふのを、何よりも怖れなければならなかつたからである。</u> 」	「 <u>(削除) 私は何度も『靴はこゝにあるぞ』と叫んで、…、私は分隊の支持を失ふのを、何よりも怖れなければならなかつたからである、かうして私が靴を持ち続ける以上、僚友は私に悪くはしないであらう</u> 」	同
B	「…、互ひに人のことはかまっていられないかういふぎりぎりの生活の中で、私も人並みでみられることを私はむしろ喜んでみた。 <u>私は死ぬかも知れないと懼れてみたが、まだ全然この靴を穿く希望を捨てゝみたわけではなかった。そしてかうして私が靴を持ち続ける以上、僚友は私に悪くはしないで</u>	「…、互ひに人のことはかまっていられないかういふぎりぎりの生活の中で、私も人並みでみられることを私はむしろ喜んでみた。 <u>(削除)</u> 」	「…、互いに人のことはかまっていられない <u>(削除)</u> ぎりぎりの生活の中で、私も人並みに冷酷でいられることを私はむしろ喜んで

	あらう、と漠然と考へてゐた」		いた」
C	…、既に返事を豫想したやうなためらひがちの言葉を聴きながら、私は何も考へてゐなかつたといふのが正しい。私はたゞ <u>わくわくしてこの苦しい瞬間が早くすぎ去つてくれ、ばい、</u> と思つてゐた。 <u>かうして周囲の者のなすがまゝに任せねばならぬ病人の悲哀があつただけである。</u>	…、既に返事を豫想したやうなためらひがちな言葉を聴きながら、私は何も考へてゐなかつたといふのが正しい。私はたゞ <u>(削除)</u> この苦しい瞬間が早くすぎ去つてくれ、ばい、と思つてゐた。 <u>(削除)</u>	同
D	…私はその時の私の心を正確に…	同	私の心理
E	かういふ情緒だけを分離した描寫では、この時私の枕にしてゐた靴はどこかへ行つてしまつてゐる。	<u>(削除)</u>	同
F	こう思った、ああ思つた	こう思った、ああ感じた	同
G	しかし私が私の経験を物語るならば、私はやはりかう思つた、あゝ思つたと書かねばならぬ。書かねば何も始まらないからである。心理は近代文學の負つた十字架である。その不正確を嘲るは易いが、心理なくて近代的人間はゐない。たゞ彼等はそれを誇つてはならない。	<u>(削除)</u>	同

対照表の【A】は靴を穿きたくて所有したい自己のために弁解する内容で、二つの言いわけが取り上げられる。一つは靴を「彼等の前に投げ出したい衝動に駆られたが、結局実行する勇気を欠いた」という言いわけで、もう一つは「靴を持ち続ける以上、僚友は私に悪くはしない」という言いわけである。「靴は火の塊となつて」という箇所が単行本で削除されたのは、恐らく靴によって自分の当時の状態を比喻しながらも、「弁解」とはならなくて、削られたからであろう。

同じように、【B】は松本の分隊の兵士が罵られる時に、自分の態度を「シニシズム」として表現するために、「一種陰惨な快感を感じてゐた」と「人並みでゐられる」とし、後に『全集』で「人並みに冷酷でいられる」という表現で十分に表す。ところが、初出誌でその直後に続く「死ぬ」「懼れ」「靴を穿く希望」という句は、前二句と比べて「シニシズム」的なイメージが弱くなってしまうという感じがする。そのため、削除されたのではなからうか。【B】の最後の「僚友は私に悪くはしない」箇所は、【A】の「分隊の支持」と結びつけることができるので、【A】に移されたわけだといえよう。

それから、【C】は自分の本当の心理を「誇張」せずに「正確」に描写すべき段落として、「何も考えていなかった」、時間が「早くすぎ去つてくれればよい」という内容で構成する。

ところが、単行本で「病人の悲哀」という句が削除された原因を追究すると、恐らくそれは通俗的な感情だと思われやすく、より正確さに徹するためであろう。

【E】は前の「正確に描いたとは感じない」という段落に理由を説明する役割をしていると思うが、単行本で完全に削られてしまった。先に取り上げた【A】と【B】は心理の書き方に、それぞれ「弁解」と「シニシズム」という言葉でその描写の不適切を説明しているのだから、道理で【E】は削る必要はない。ここであえて削られたのが不自然に思う。逆に言えばそれこそ、次の「結局靴だけが事実」という段落を主張して、強調する働きを持っているのではないだろうか。何故なら、いくら説明しても「心理」を正確に捉えて表現するのは困難であり、現実に存在する「事実」が心理を左右するキーポイントであるので、それを描くしか正確に表現できないからである。その「心理」と「事実」の関係を強調するため、【E】段落を削除したのではなかろうか。

【G】も完全に削除されてしまった。この箇所は、人間の心理を描かなければ近代文学にはならないという作者の文学観を示しているといえよう。削られた原因を追究してみると、作者の文学観が変わったからだと思えない。むしろそれは作者の一貫した創作方法である。改稿でそれを削ったのは、文章が説明的にならないように、しかもその箇所が戦場における事実とは殆ど関係ないので、省いたのではないか。

【D】と【F】を見ると、作者は「心理」に拘っていることが明らかである。対照表で取り上げないが、心理に関する改稿は原文の他の箇所でも見られる。例えば初出誌での「彼が私の眼付を了解したかどうか私は知らない」という表現を『全集』では「彼が私の心理を見抜いたかどうかは知らない」に改めている。そして、「事実」を追求しようとする作者の姿勢も、以下の五箇所で傍証される。

対照表Ⅱ 「事実」をめぐる改稿

	初出誌『小説界』	単行本『サンホセの聖母』
H	船中 <u>十日分</u> の甘味品の半分を送った。	船中 <u>二十日分</u> の甘味品の半分を送った。
I	…、彼は…風邪を得て帰り、 <u>一週間</u> で死んだ。	…、彼は…風邪を得て帰り、 <u>五日</u> で死んだ。
J	監視班、消火班、整理班などを設けたが、 <u>もう一つどう呼んだか忘れてしまったが、戦闘準備をして甲板へ出る班があつた。</u>	監視班、消火班、整理班、 <u>戦闘班</u> などを設けたが、この最後の班は警報と共に戦闘準備をして甲板へ出て、潜水艦と戦ふのを任務とする。
K	彼等の體は周囲の水と不斷の滲透状態にあるものだといふ <u>真理</u> を體得した。	彼等の體は周囲の水と不斷の滲透状態にあるものだといふ <u>事実</u> を體得した。
L	食慾と平静の關係に関する私の解釋は例證が足りないといふ人があるかも知れない。	<u>以上</u> 食慾と平静の關係に関する私の解釋に、 <u>證據</u> が足りないといふ人があるかも知れない。

\* 【K】は「靴の話」の内容で、他は「食慾について」の内容である。『全集』の内容は単行本『サンホセの聖母』のと同じであるため、ここで省く。

【H】は「私」が「支給されていた」「甘味品」を「わが子」へ送ったことに関する記述で、【I】は風邪を引いた池田の死に関する記述である。＜強調＞＜対比＞＜アイロニー＞といっ

た表現上のレトリックがあるが、【H】と【I】は文章を修飾するために特に改められたとは考えられず、却ってより事実に還元するために改められたのではなかろうか。同じ動機で改めたのは【J】でも見られる。そして【K】の「彼等」とは「鮫」である。【K】と【L】ではそれぞれ前後の言葉は差がそれほど大きくはないが、作者が初出の「真理」を単行本では「事実」に改稿し、また「例証」を「証拠」に改稿した。作者は「真理」「事実」「例証」「証拠」というような言葉に極めて気を遣っていたことがわかる。要するに【H】～【L】から、より「事実」に近い表現を追求しようとする作者の創作理念が見られる。

以上重要な改稿の部分を検討してきたように、「靴の話」一篇では作者が関心を持っているのは「靴」ではなく、靴に象徴された戦場の「事実」と、その事実の影響がもたらした一兵士の「心理」であろう。そのため、作者は一つの事件に対して【A】、【B】、【C】で対照したように、「私」の心理に関する「幾通り」の描き方によって分析し批評するのである。「靴の話」の末尾に「事実」だけが「正しく且重要であった」と書いてあるように、結局「心理」は「事実」に還元されねばならないという論理に至ったのである。

## 2・2、「食慾」をめぐる改稿——人間の欲望に関する捉え方

「食慾について」は、まず「私」が戦時戦後の「老人の食意地」を議論している「中年男」に反対するところから始まる。「中年男の食意地は、老人や青年より意地がきれいでない」ということを「目撃」した「私」は、二人の兵士を例として挙げて述べる。一人は池田という「わが友」で、常に俘虜の食糧を狙ったり、いざという時に必ず食物を取って食べたり、食物のためにどんなことでもする。もう一人は木下少尉という「我々の小隊長」で、料理の三分の一を残すのが将校の心懸けという習慣を無視して、全部食べてしまい、或いは自分の夜食のために料理を残して蓄える。それに、巡視と称して、分隊の集めたバナナを食べる。「私」はこれを物語りながら、「食慾と平静の關係」を発見し、最後「食慾のために」「彼等が幸福であってくれればいいと思っている」。即ち、「異常な食慾」のお蔭で却って「平静な態度を与え」られ、彼等が「生死につき我々と違った平静な観念を持っているとすれば、これは羨むべきであった」と「私」は考えた。

改稿された部分をまとめてみると、一番重要なのは「食慾」に関する描き方の違いだといえよう。まず以下の表で対照する。

対照表Ⅲ 「食慾」をめぐる改稿

	初出誌『小説界』	単行本『サンホセの聖母』	『大岡昇平全集』
M	老人の意地きたなさは戦時からの食糧難で立證されたいらしい。	老人の意地きたなさは戦中戦後の食糧難で…。	老人の食意地は戦時戦後の食糧難で…。
N	彼の示した <sup>(ママ)</sup> 貧慾な行為については、読者も既に諸方面において豊富な例に立會つてをられることゝ思ふから詳細に語るのは省くが、要するに…謙讓な彼が、食物のこととなる	彼の示した食慾な行為については、読者も既に諸方面において豊富な例に立會つてをられることゝ思ふから詳細に語るのは省くが、…。	(削除)食慾行為については、読者も既に諸方面において豊富な例に立會つておられることと、思ふから彼の示した行

	と人が変わったように誅斂苛酷になり、自分の慾望を露骨に主張して恥じないのである。		為の詳細に語るのは省くが、…。
O	しかも狭い船室での遽だしい準備の際に、素速くその品物をポケットに滑り込ませる沈着があったのである。／以来私は彼を尊敬した。／しかし任地に着いて前述のやうに食糧が十分でなかった時の彼の行動は、あまり尊敬すべきものではなかった。	…／私は感服してしまつた。／しかし任地に着いて、前述のやうに食糧が十分でなかった時の彼の行動は、あまり感服すべきものではなかった。	同
P	私が昨夜の彼の <u>だらしのない</u> 行動	私が昨夜の彼の <u>奇妙な</u> 行動	同

【M】（意地きたなさ→食意地）、【N】（貪慾な行為→食慾行為）、【O】（尊敬→感服）、【P】（だらしのない→奇妙）という四つの箇所から見ると、作者は「食慾」と「貪慾」とそれが示した「行為」をデリケートに分析していることがいえよう。【M】は次の文「中年男自体それほど意地がきれいなわけではない」と対照するため、初出誌の「老人の意地きたなさ」を『全集』で「老人の食意地」に改めた。【N】では、初出の「<sup>(ママ)</sup>貧慾な行為」は単行本で一般論的な「食慾行為」という言葉に置き換えられた。それは後の「彼の示した行為」即ち「自分の慾望を露骨に主張」することに対して区別をつけるため改めた。そして、【O】では船で「重大な危険の裡」に警備する時、池田は「心残りなく甘納豆を喰べたいという慾望を起す余裕」を持っていて、食物を「ポケットに滑り込ませる沈着があった」と描写している。彼のこういう反応に対して、「私」の態度は初出誌の「尊敬」から単行本の「感服」に変えられた。「尊敬」という言葉は相手の行動に対して表面的な捉え方であるのに対して、「感服」は心から敬服し感心する意味を含んでいると感じられる。即ち、「感服」のほうがその衝撃の深さや強さをより強めることになる。恐らく大岡にとってこういう異常な反応に対して「尊敬」よりも「感服」のほうが適切だと思っていたらう。表現の上でたとえわずかな意味の違いがあっても、大岡は異常な行動や心理に対して、よりリアルな表現を高めようとする意図がここで窺われる。

【P】では、就眠中の彼等は銃声を聞いて敵襲と信じ、「急いで帯剣をつけ銃を取って床に伏せた」が、ただ池田は銃を持たずに、「いつまでもそこにはりついたように立ったままである」。彼のこういう「行動」に対して、作者は初出誌の「だらしのない」という言葉を単行本で「奇妙」に改めた。それに反して、後の木下少尉のことを物語るところに「だらしのない」という言葉がまた現れるが、改稿されなかった。原文を引用すると、「山へ入って事態が絶望的になっても、私はこのだらしのない將校の態度が、平穩な駐屯中と全然変わらないのに氣が附いた」。ここでの「だらしのない」とは、彼が將校であるのに、軍隊のおきてを無視して料理を全部食べてしまったり、自分の夜食のために残して蓄えたりするという行為を指している。この二つの描写を比較してみると、前者はいざという時における食慾行為の異常さ・不思議さを強調するために「奇妙」に改めたが、後者は単に人間の貪欲や利己心を強調するためにその

まま使って単行本で改稿されなかったといえよう。

以上の考察したように、作者は「食慾」及びその欲望の示した行為に関する言葉遣いを、かなり慎重に取り扱っていた。その原因を究めていくと、恐らく作者は「食慾」といった「欲望」を一方向的にマイナスの面に傾けないように慎重に取り扱ったのではなからうか。即ち、リアルな表現に努める姿勢である。さらにいえば、作者の意図は「欲望」そのものを批判するのではなく、むしろ戦争の非日常性或いは人間性を歪める本質を批判しようとしているのである。

### 2・3、「僚友」をめぐる改稿——戦場に於ける人間関係

「靴の話」と「食慾について」において、「僚友」「戦友」「同僚」「仲間」といった言葉が用いられる。そして改稿された箇所を検討してみると、言葉遣いに関する箇所があり、およそ次の表でまとめることが出来る。

対照表IV 呼び方をめぐる改稿

	初出誌『小説界』	単行本『サンホセの聖母』
Q	私は死んだ <u>戦友</u> の靴を穿いて戦ふ <u>こと</u> にちよつと通俗な感傷も感じたが、…	私は死んだ <u>僚友</u> の靴を穿いて戦ふ <u>運命</u> にちよつと…
R	私の洩らした感想を聞いて <u>傍の俘虜の同僚</u> がいつた。	私の洩らした感想を聞いて <u>傍にゐた俘虜の仲間</u> がいつた。
S	私は収容所では原則として自分の意見を <u>主張しない</u> ことにしてゐたが、この時は <u>むつ</u> としていひ返した。／「…どつちが <u>忠義</u> かわからんさ」	私は収容所では原則として自分の <u>本当の意見</u> はいは <u>ない</u> ことにしてゐたが、この時はいひ返した。／「…どつちが <u>戦友</u> のことを思つてるかわからんさ」

\*『全集』の内容は単行本『サンホセの聖母』のと同じであるため、ここで省く。

【Q】(松本・戦友→僚友)、【R】(俘虜の同僚→俘虜の仲間)、【S】(忠義→戦友のこと)という改稿されたところを見ると、作者は同じく戦場における友軍であっても違った称を用い、そこに作者の「僚友」に対する意識があるといえよう。次に「靴の話」「食慾について」二編を全面的に検討すると、「わが友」「僚友」「友軍」「仲間」という四つのカテゴリーに分けられよう。「わが友」は二箇所だけ現われ、門司で「同じ室に起居して」、船上同じく「戦闘班」に属する「池田」のことを指している。彼に対して特別に「わが友」を使うのは、やはり彼が自分と一番関係の深い、密接している人であるからだろう。

「僚友」という言葉は最も多く用いられ、「靴の話」で「分隊を異にしていた」「松本」のことを指し、また「私が靴を持ち続ける以上、僚友は私に悪くはしない」、「食慾について」で池田が「自分の水筒ばかりではなく、僚友の分全部下げて来た」という箇所がある。恐らく「僚友」とは一番広義的に、つまり同じ日本軍の軍人を描くときに用いられる言葉だろう。そのため、本稿の2・3節に「僚友」というタイトルを用いることにする。

そして「友軍」という言葉は「靴の話」で三つだけ現れる。「何故友軍の靴がいやなんだ。…そういうことをいう奴は、今に友軍が来たらみんなパタイじゃ／…その頃レイテの俘虜はま

だ日本軍が帰って来る希望を持っていた。…（友軍が来ても糧秣は足りないだろうと経験から予想していたのである）／…／どっちが戦友のことを思ってるかわからんさ」という段落から見れば、「友軍」という言葉は「戦友」と同じく「日本軍」を指しているであろう。

最後の「仲間」という言葉は「軍隊」の範疇から離れたところで使われていた。「通訳として役員の仲間」、「俘虜の仲間」（ある日本軍の水兵）、さらに『サンホセの聖母』の稿で削られた「この仲間は門司における私の飲み友達であつた。我々は船が無事マニラに到着するなどは思はないことゝし、有金残らず飲んでしまった」というこの三箇所しか、「仲間」という言葉が書かれていないため、「軍隊」の範疇や束縛から解放された時に用いられるのだと推測する。以上は呼称に関する検討であるが、続いて「僚友」を描写することに関する改稿を検討する。以下の表でまとめる。

対照表V 「僚友」のことをめぐる改稿

	初出誌『小説界』	単行本『サンホセの聖母』	『全集』
T	彼等が <u>いかにわが分隊長にからかはれ罵られ追い歸されたかはここに記すに忍びない</u> 。彼等の分隊長は既にマラリヤで死んでみたので、兵隊ばかりでは對抗出来なかつた。	彼等が <u>(削除)</u> わが分隊長にからかはれ、罵られ、追い歸された <u>だけであつたのはいふまでもない</u> 。彼等の分隊長は既にマラリヤで死んでみたので、 <u>要するに兵隊ばかりでは結局老練な下士官</u> に對抗出来なかつた。	…、要するに兵隊ばかりでは <u>(削除)</u> 老練な下士官に對抗出来なかつた。
U	私は <u>あきらさまに</u> 「君はいい人だが食事だけはつき合わない」といつた。彼は「ふん、どうもねえ」と淋しさうに笑つた。その様子はやはり憎めない。	私は <u>遂にあからさまに</u> 「…」といつた。 <u>(削除)</u>	同
V	私は彼等が食慾のために他より幸福であつたらうと推測するのはたゞ私が <u>彼等の幸福を願つてゐるから</u> である。	私は彼等が食慾のために他より幸福であつたと推測するのは、私が <u>彼等が幸福であつてくれればいゝと思つてゐるから</u> である。	同

【T】は初出の「記すに忍びない」を単行本で「いふまでもない」に改めたのは、前者は自分の立場を上位にして彼等を貶めると感られるのに対し、後者は主観を避けて客観的に表現すると感じられるからだろう。そして「老練な下士官」を付け加えて、兵隊における権力構造を一層明らかにする。【U】は「私」に「食事だけはつき合わない」と言われた池田の反応が単行本で完全に削除された。何故なら、その文脈から見ると、作者は「遂に」を加えて相手の反応と「私」の判断を削るということによって、戦場における「食」に関する「深刻な事実」をさらに暴き出したのではないかと思う。つまり、池田はどれほど「食」に執着しているか、「私」はどれほど自分の利益を保つか、この段落で味わえよう。【V】では「食慾について」の結びとして作者は、すでに死んでしまった僚友たちが生きていたときに幸せであればいいという願

望を表す。改稿された部分は一層「私」の願いを強くすると考えられよう。この結びを通して、作者の「僚友」が持っている欲望の醜さへの批評性があり、一方そういう境地に追い込まれた彼らに対する関心や同情もあると感じ取られる。

以上分析してきたように、作者はまず呼称によって「僚友」のことを把握して気を配り、その上お互いの関係に関心を持ち続けたといえよう。ところが、「僕らはお互いにわざとらしい感情を持っていなかった」という『西部戦線異状なし』の一節が引用されたように、同じ敵を有している「僚友」同士でありながらも、「戦場」に置かれた時の人間関係は、やはり「利益」と「権力」によって決められたものであることを示している。そういう歪んだ「僚友」との関係、また僚友間を通して一層戦場における「深刻な事実」——「欠乏」及びその「欠乏」のもたらしたあらゆる人間としての弱さ・醜さ——を指摘したのである。

### 3・終わりに——戦争批判の方法と特色

「靴の話」「食慾について」だけから大岡の戦争の批判意識が十分に見られることは疑えない。以上改稿をめぐって考察してきたように、恐らく大岡は自分に課した仕事は、戦争批判ということではなく、戦争批判の上で戦争をどう描くかということであろう。彼は「記録文学について」<sup>10</sup>という文章で、「本年度の記録文学の流行を開いたのは、五月に発表された吉田満氏の『軍艦大和』でした」と述べ、『軍艦大和』を始めとして、高木惣吉の『連合艦隊始末記』（文芸春秋新社、1949）や草鹿龍之介の『運命の海戦』（文芸春秋、1949）が続出していることに対して、当時のそういう記録文学の流行を批判し、「勇壯調を必要として「感傷的な郷愁にすぎず」、「信憑性に一抹の暗影を投げて」しまった作品が溢れていることを指摘した。言い換えれば、大岡は感傷的主観的な文体を避けて、「信憑性」のある戦争物を追求しようとしたことが窺える。また、「僕と”戦争もの”」<sup>11</sup>という一文で、彼は自分の「志」を「異常な事件や環境におかれた人間を、出来るだけ日常的な観点から考える」こととし、「外部的な事件に動かされつつも、その中に動かないものをつかむ。この作業は当然人間を心理的に見ることを要求します。」と述べている。つまり、大岡は戦争という「異常」な経験を「信憑性」のある記録として描こうとし、同時に「日常的な観点」から「人間を心理的に見て」「動かないものをつかむ」のである。それに「あんまり自分を被害者にしたてたくなかったもんだから」<sup>12</sup>と彼は言い、自分の経験を小説化するとき、その経験を選択して、例えば「油布のつまった銃」や「帯剣を肉切りに使われた」ことをそのまま小説にしなかった。

要するに、大岡は言葉遣いや表現を何度も改稿して、リアリズムで小説を貫いた。誰かを弁護するのではなく、また感傷的郷愁的に不満をいうのでもない。戦争と戦場の出来事、特に戦場という異常な空間に置かれた人間の行動及びその心理を、よりリアルに表現しようとして努めていたのである。これは大岡の創作方法だといえよう。戦争を批判するとき、単に戦争の悪、

<sup>10</sup> 大岡昇平「記録文学について」『全集14』(筑摩書房、1996.3)。pp.39-40。初出は『夕刊新大阪』第1405号から第1406号まで(1949.12.20-21)。

<sup>11</sup> 大岡昇平「僕と”戦争もの”——これから何故「武蔵野夫人」を書くか——」『全集14』(筑摩書房、1996.3)。p42。初出は、①『夕刊世界経済』第1307号(1950.3.23)、②『産業経済新聞』(大阪)第2716号(1950.4.25)がある。

<sup>12</sup> 大岡昇平『戦争——語りおろしシリーズ』(大光社、1970.12)。p143。

戦争を起こした国家や軍隊の非を訴えるだけなら、読者に感動や共感を与えられず、批判という効果ももちろんない。大岡は恐らくそれを相当意識し、盛んに改稿を行つたに違いない。「大岡昇平は、かれ自身をもふくむあらゆる人間に対しつねに批評的だが、しかもそれは、やはりつねに励ましに満ちている批評性なのでもあった。」<sup>13</sup>と大江健三郎の指摘した意味が、「靴の話」「食慾について」からも窺われる。自分のものでない「靴」を狙って手に入れた「私」や、「食物のこととなると人が変わったように誅斂苛酷」になった「僚友」や、「脆い靴で兵士に戦うことを強いた」「欠乏のある」国家など、すべて大岡の批評の対象となる。それは自分が戦争経験者であったことをいつも意識していたからである。しかし、戦場の「事実」を強調したり僚友の「幸福」を願ったりするところから、作者の前向きな姿勢と「励まし」が認められよう。初期作品によっても、大岡の戦争を批判する姿勢と一貫した創作理念・方法は、この改稿された内容から見れば、着実な成果を出したといえる。

注記：初出稿や単行本という注で説明していない原文の引用文は、全部『大岡昇平全集 2』（筑摩書房、1994. 10）によるものである。

#### テキスト

- 1、大岡昇平『大岡昇平全集 2』筑摩書房、1994. 10。
- 2、大岡昇平『大岡昇平全集 14』筑摩書房、1996. 3。
- 3、大岡昇平『サンホセの聖母』作品社、1950. 6。
- 4、大岡昇平「靴と食慾」『小説界』一・二月合併号、1949. 2。

#### 参考資料

- 1、野田康文『大岡昇平の創作方法—「俘虜記」「野火」「武蔵野夫人」』笠間書院、2006。
- 2、花崎育代『大岡昇平研究』双文社、2003。
- 3、『岩波講座 日本文学史 第14巻 20世紀の文学 3』岩波書店、1997。
- 4、大江健三郎 他『大岡昇平の世界』岩波書店、1989. 9。
- 5、磯田光一「二つの小説作法—丹羽文雄と大岡昇平」『国文学』11-5、1966. 5。
- 6、中島健蔵「坂口安吾と大岡昇平」(1948. 10)『日本文学研究資料叢書 大岡昇平・福永武彦』有精堂、1990。

<sup>13</sup> 大江健三郎「戦後世界につらぬく批評性」『解釈と鑑賞』44-4、1979. 4。p37。